

英語とアメリカへの抵抗 ～アメリカで「英語支配論」を教えて

津田幸男

外国語センター

人文科学研究科現代語・現代文化専攻教授

(つだ ゆきお／言語政策、英語支配論)

はじめに

2007年1月～5月の5ヶ月間、米国国務省の主催する学術交流プログラムであるフルブライト委員会の招聘で、アメリカ合衆国カリフォルニア州のサンマテオ大学で「異文化コミュニケーション」という科目を講義する経験が出来た。

この招聘は私にとってはいわゆる「棚からボタ餅」的なものであった。実はこのプログラムで派遣されるはずの先生がキャンセルしてしまい、困ったフルブライト委員会のオフィスが代わりに誰かいないものかと私に問い合わせがあったので、それでは私が行きましょうと返事をしたら、派遣が決まってしまった（もちろん、さまざまな手続きを経たが）。私はすでに1998-99年、フルブライトの研究者スカラシップをいただいて10ヶ月間アメリカで研究が出来たので、2度もフルブライト・プログラムに関わることは大変名誉なことだと感じている。

同時に、今回アメリカで持論である「英語支配論」を講義できる良い機会である

とも思ったので、この仕事をやってみる気になった。私は1980年代に大学院生として南イリノイ大学で留学中に、Teaching Assistantとして講義を担当した経験があるので、アメリカで講義すること自体にはさほどの抵抗はなかった。しかし、私の「英語支配論」はひと言で言って「反アメリカ的」であり「反英語的」であるので、いったい私の議論にアメリカ人はどのような反応を示すのか、楽しみでもあり、またちょっと怖いような気持ちでアメリカに渡った。

講義と講演の訪問先

今回の主な仕事は、フルブライト・スカラーとしてサンマテオ大学で「異文化コミュニケーション」を講義することであったが、折角アメリカに行ったので、色々なところに出かけて講演を行なった。以下に訪問地と訪問先を記しておく。

スタンフォード大学文化人類学科

(カリフォルニア州)

カナダ大学哲学クラブ

(カリフォルニア州)

ワシントン大学英語学科

(ワシントン州)

サンホセ州立大学言語学科

(カリフォルニア州)

バーリンゲーム市ロータリー・クラブ

(カリフォルニア州)

サンマテオ大学はいわゆるコミュニティ・カレッジで2年制の大学で、周辺地域の人々に開かれた大学である。私のクラスの受講者は15人。夜の3時間のクラスで週1回開講のクラスであった。学生の出身は多様で、いわゆるアメリカ生まれの白人は少数で、ポーランド、ブラジル、イラン、メキシコ、中国、フィリピン等世界の縮図のようなクラスであった。学生たちはとてもフレンドリーで、最終クラスでは感謝のしるしに大きなケーキをプレゼントしてくれた(写真1参照)。



写真1 サンマテオ大学の最終講義：大きなチョコレートケーキでお別れ会

「英語支配」とは何か？

さて、「英語支配論」とはどんな考えなのか、ここで簡単に説明しておく。「英語支配」とは、英語が世界に広まっているがゆえに起こっているさまざまな不平等と格差と差別のことをいう。「英語支配」により、少なくとも次のような問題が起きていると私は考えている。(詳細は拙著『英語支配とことばの平等』(慶応大学出版会、2006年)を参照)

1. コミュニケーションの不平等：英語話者が圧倒的に有利である
2. 言語抹殺：少数言語の衰退と消滅
3. 文化の画一化：アメリカ文化の世界的浸透による地域文化の衰退
4. 情報格差：英語の情報が支配的になる
5. 精神支配：精神と価値観の英語化、西洋化、アメリカ化
6. 英語を基盤とした序列化：英語話者が社会階層の上層部に、非英語話者が下層に、という「英語格差」の出現

このように、英語は単なる言語や手段を越えて、人と人、国と国の間に階層と序列という支配構造を生み出している。今や英語は強大な権力となっており、英語話者には富と権力が集まり、非英語話者は富と権力から遠ざかっているのである。このよう

な英語支配による不平等と格差と差別の問題を明らかにするのが英語支配論である。

アメリカ人の反応

アメリカ滞在中はいつも「英語支配と英語格差（'English Hegemony and English Divide'）」というタイトルで講演を行なった。内容は上で述べたようなものであった。（講演の様子は写真2参照）

アメリカ人の私の「英語支配論」に対する反応はおしなべて「否定的」であった。つまり、「英語支配論」に対する拒否反応がかなり強く見られた。私の「英語支配論」は英語とアメリカが世界中で支配的になっていることを批判する趣旨なので、多くのアメリカ人は自分が批判されたような気持ちになり、拒否反応を示したようだ。ある会場では、大声でわめき散らす人が出ることもあった。こういう中で、英語で対応するのは苦勞したが、どの会場でもなんとか切り抜けることが出来た。彼らの拒否反応を示した意見をまとめると次のようになる。

意見（その1）：「世界はもうすでに英語を選んだのだから、問題はない」

意見（その2）：「言語問題に関して規制をすべきではない。自由でよい。」

意見（その3）：「私は第二言語としての英語に上達した。それはいけないことだろうか。」

意見（その4）：「文化の喪失などせずに多くの人々は英語を使っているのだから、英語支配

を心配する必要はない。」

意見（その5）：「問題は経済や政治のシステムであつて、英語支配ではない。」

意見（その6）：「英語国民や英語国が英語支配の責任があるのではない。なぜなら英語を求めているのはその他の世界なのだから。」

意見（その7）：「いつの時代も支配言語はあったもの。ギリシャ語、ラテン語、フランス語といった具合に。現代は英語だ。その現実を受け入れるべきだ。」

このように大半は「英語は悪くない」「アメリカは悪くない」という自己正当化の意見であった。

少数ではあるが、「英語支配論」の問題提起に賛同する人もいた。「言語多様性」や「ことばの平等」の重要性を認識している人もいた。サンマテオ大学の講義では時間をかけて「英語支配論」を説明したので、学生はかなり良い理解を示した。特に英語を母語としない学生たちは私の講義を聞いて、自分の母語（スペイン語や中国語など）を大事にしなければならないことを認識したようだ。



写真2 バーリングゲーム市ロータリー・クラブ講演

講義・講演の感想と成果

今回サンマテオ大学を始め6箇所で開催・講演が出来た。少ないところでは10名程度、多いところでは150名程度の聴衆がいて、合計300人ほどに「英語支配論」を話したことになる。これだけでもそれなりの意義があると思う。

アメリカ人の反応はおおむね「否定的」で反発が大きかったが、それは講義・講演の内容が刺激的であったことを示している。「英語支配論」は、アメリカ人が抱いている「自民族中心主義」「西洋（アメリカ）優越主義」を揺さぶるものであり、それによりかれらの「ホンネ」が引き出せたと思う。アメリカはすばらしい国だと彼らは思い込んでいて、批判を謙虚に受け入れるという態度はほとんど見られなかった。そして、「謙虚さが足りず、自己正当化する」という傾向がアメリカ人の中にあるということも再確認できたのはひとつの成果であると思う。

少数であるが私の「英語支配論」に共感してくれた学者がいて、その縁で論文執筆につながったこともあり、わざわざアメリカに出かけて講演してよかったと思った。

今後の計画

まず、今回の経験を講義に生かしていきたいと思う。私の「英語支配論」の講義も今回の経験により一層厚みが増すと思う。ア

メリカ人の拒否反応の様子などを学生たちに話すことにより、アメリカ人の一面の理解になると思う。

今回の講演を基にした論文をすでに出版することができた。*China Media Research* (<http://www.chinamediaresearch.net/>)を参照してご一読下さい。

また、今回の経験の記述をおりませで、最近日本語でも原稿を仕上げたところである。現在、出版の準備にかかっているところである。特に「英語」と「格差」の問題に焦点を当てたもので、私の「英語支配論」に新しい視点を与えるものとなるはずである。

今後も「英語支配論」を発展させて、とかく「英語信仰」や「アメリカ信仰」に走りやすい日本人に問題提起を続けていきたい。それにより、少しでも「英語支配」と「英語格差」の呪縛が弱まり、より公平な国際コミュニケーションが実現することが、私の「夢」である。